

四国大学紀要, (A) 41 : 49–62, 2013
 Bull. Shikoku Univ. (A) 41 : 49–62, 2013

「労働」「働く」とはどういうことか ——ベルクソンの社会論を手がかりに——

谷口 薫

La question du Travail chez Bergson

Kaoru TANIGUCHI

ABSTRACT

Le présent article a pour but de mettre au clair les traits caractéristiques de la notion du travail dans la pensée bergsonienne.

Premièrement, Bergson examine le travail humain à travers la fabrication des outils, puisque l'intelligence humaine nous rend essentiellement Homo Faber. C'est surtout sur la fabrication des machines que le philosophe se concentre, car la machine représente nos outils reconstruits avec des éléments bien découpés. Celle-ci est aussi importante car elle nous permet d'élargir nos corps ; elle devient notre nouvel «organe». Mais l'intelligence n'est qu'une faculté limitée qui se caractérise par sa fatigue et sa paresse. C'est d'ailleurs la raison pour laquelle elle ne peut pas entièrement réaliser le dynamisme vital.

En second lieu, l'examen du travail humain se développe sous deux aspects dans les *Deux Sources* : d'une part l'obligation des habitudes sociales, et d'autre part le travail inlassable du mystique.

Nous retrouvons ainsi la problématique fondamentale de la pensée bergsonienne, celle de la réalité mouvante du vital et les limites de son adaptation matérielle.

KEYWORDS : Bergson, travail, fabrication, intelligence

はじめに

昨今、大学教育の中で非常に重要視されていることの一つに「キャリア教育」がある¹。学生にとっても卒業後の就職は最大の関心事の一つで、一向に好転しない経済状況や雇用情勢が伝えられる厳しい状況の中で、悪戦苦闘している姿をしばしば見かける。こうした動向を受けて、各大学では「キャリア教育」や「社会人育成」のプログラムを編成し、工夫をこらして展開している。こうした教育プログラムの中で大きな柱の一つとなるのが「自己の個性を理解すること」であり、学生が将来つく仕事について考える糸口として、「自分の好きなことは何か」「自分とはどんな人間か」といったいわゆる「自分探し」のためのワークシートなどがしばしば活用される。確かに、学生達が早い段階から自己アピールの仕方を学んだり、そのための文章表現法を訓練することには就職活動に向けて役に立つものだろう。教育機

関がこうした「キャリア教育」を導入すること自体の意義や必然性は十分認められよう。けれども、立ち止まってよくよく考えてみた時に、職業教育の手始めとして「自分探し」「自分語り」をするという発想に、筆者は何となく居心地の悪い違和感を覚えてしまう²。「自分の好きなこと」を明確にするという「自分探し」をすることは、社会や組織の中で「仕事をする」「働く」ために本当に役に立つのだろうか。もっとはっきり言えば、仕事とは「自分のため」にするものだろうか³。

上で述べたことが教育者や教育機関に対する違和感である、すなわち彼らの用いる教育や教授法が前提としている枠組みに対する違和感であるとすれば、他方で、学生達に対して、あるいは学生達が内面化している発想に対しても、また別の違和感を抱くことがある。1990年代以降に生まれた最近の学生は、詰込み型の教育への反省から実施された「ゆとり」重視の教育に象徴されるように、個性や意欲を

評価され尊重される教育を受けて育ってきた世代である。彼らに接していると、極めて自尊心が低く自信を持ってない学生が多くいる一方で、自分の頑張りが成果の良し悪しにかかわらず必ず評価され実を結ぶということを自明視している傾向が強く見られるように感じる。より丁寧に言い直せば、意識的であれ無意識的であれ「自分の頑張りが必ず評価され実を結ぶ」ことがうまく行かない現実を多少なりとも感じつつも、たとえ幻想であっても成果にかかわらず「評価されたい」「大事にてもらいたい」「理解してもらいたい」という願望が強く、そうした評価が得られなかったりそうした「幻想」が守られなかったりすると、いとも簡単に自己肯定感が崩れてしまうもろさを抱えた学生が増えているように感じる。

どちらの発想にも共通して見られるのは、「かけがえのない自分」というものを自明視する考え方であり、この「かけがえのない自分」は何らの成果や能力を発揮すること以前に全面的に肯定されるという根本原理である⁴。今はこうした自己肯定感それ自体の意義や重要性を問いたいのではない。ここで問題にしたいのは、就職活動という容赦ない競争に立ち向かい、組織の中で労働する人間になるために、こうした「自己の個性」を大事にし「私の好きなこと」を前面に押し出すようにして探られた職業観・労働観が、果たして本当に有効なのかという疑念がわいてこないかという点である⁵。こうした居心地の悪さや疑念が何であるのか見つめ直すためにも、今一度「労働」について問い直してみたい。

次節以降、こうした「自己の個性」を活かす労働という発想とは全く異なった観点から労働を捉えたものとして、フランスの哲学者ベルクソン（1859-1941）の「労働」論を取り上げたい。『創造的進化』などの著作で独自の生命哲学を展開したベルクソンは、労働をめぐる思索する際にも、生物種の一つである人間にとって労働とは何かという観点から考察を深めていく。彼にとって労働の問題は、蟻塚の働き蟻にとって働くことがそうであるのと同様に、種の生存のための生物的営みであるということをぬきに捉えてはならない。そしてこうした観点から労働を捉え直して行くと、通常私たちが典型的に労働

だと考えるような組織の中での労働は、創造的な「自分らしい」人格を発現するのとはむしろ逆に、第一義的には社会の圧力や社会的義務を自動的に果たすために行われるものであることが明らかになるだろう。

以下では、まずベルクソンがその著作の中で「労働 travail」「働くこと travailler」というテーマをどのような仕方で展開したのかを「製作的知性」の議論を通して確認し、続いて「閉じたもの」と「開かれたもの」というキーワードで展開される彼の社会論を援用して組織の中で働く人間について考察を進めて行こう。

ベルクソン哲学における「労働」（1）製作行為という「労働」と「働く」知性

「意識」「生命」「持続」といったベルクソン哲学のキーワードを並べると意外に思われるかもしれないが、「仕事・労働 travail」「働く travailler」という言葉はベルクソンのテキストの中にしばしば登場する用語の一つである。「仕事・労働」「働く」というタームは、知性の活動について用いられる比較的否定的な文脈と、持続や生の創造的な練成について用いられる肯定的な文脈と、主に二つの文脈で用いられる。

人間が自らの身体を用いて働くという意味での「仕事・労働 travail」は、主に『創造的進化』以降、製作的知性を論じる文脈の中で主題化される⁶。ベルクソン哲学において、人間の「仕事・労働」についての思索は、製作的知性が道具を作ること、なかでも道具としての機械を製作することをめぐる展開する。

『創造的進化』において、生命進化を説明する際に、ベルクソンは本能と知性という二つの進化の方向を区別した。ベルクソンにとって、生命は本来「絶え間ない創造」（EC23）であるが、地球上で進化して広がる生命は、純粋な創造的意識ではなく、物質と拮抗して様々な生命種を生み、自らを取り巻く物質にはたらきかけていく爆発的推進力である。ベルクソンによれば、物質にはたらきかける力としての

生命には、二つのはたらき方があり、それが知性と本能である。バルクソンは本能と知性について次のように言う。

「さて、この（生命に内在する）力は、なまの物質 *matière brute* にはたらきかける二つの仕方の間で選ぶことが出来る。この力は、有機的な *organisé* 道具を作りそれを用いてはたらくことで作用を直接的なものとして *immédiatement* なすことも出来る。あるいは、必要な道具を自然的に有機体が有する代わりに、自分で無機物を加工して道具を製作するような有機体のうちで、作用を間接的なものとして *médiatement* 生じさせることも出来る。こうして知性と本能が生まれる。知性と本能は、発達することでますます分かれ行く *diverger* が、決して完全に互いから離れてしまうことはない」（EC142-3）。

本能と知性とは、ともに生命に内在し、それぞれの生命種の行動を導き困難に対処するために役立つ二つの力である。本能は、自らの身体という、自然によってあらかじめ与えられた道具を用いて、保留や選択の余地なく行動することしか出来ない点に特徴がある。本能は、生物の有機的身体およびそれにそなわる諸器官のような、有機的な道具を用いる。これに対して知性は、有機的身体という道具では満足せずに、自分で無機物を加工し道具を作り出すことが出来る。また、知性は行動を導く際に常に直接的に行動を実現するのではなく、いくつかの可能性の中から選択したり、途中で行動を保留したり、媒介を通して間接的に行動を導いたりすることが出来る点に特徴がある。バルクソンによれば、様々な生命種の中で、本能の方向に最も進化した種が昆虫であり、知性の方向に最も進化したのが人間だとされる。従って、バルクソンにとって人間は、何よりも「道具」を製作し「製作的思考」をする知性をそなえたものとして特徴づけられる。「知性とは、その根源的な歩み *démarche originelle* と思われる点から考察するなら、人為的なものを作る能力、特に道具 *outils* を作るための道具を作る能力であって、その

ような製作を無限に多様化させる能力である」（EC140）。従って、人間とは、「ホモ・サピエンス（＝知性の人）」というよりも、「ホモ・ファベル（製作人）」（EC140）と呼ばれるべき存在だとバルクソンは考える。製作することは、労働の主要な一面である。バルクソンにとって、知性的な人間とは製作＝労働するものだったと言ってもいいだろう。

機械とは何か（1）部品という部分によって再構成された反復的再生の道具

では、製作的知性はどのような道具を製作するのか。通常の言葉遣いで「道具」というと、金槌やナイフなど比較的単純な構造を持ったものを連想しやすいかもしれないが、バルクソンが、製作された道具を象徴するものとして言及するのは「機械」である。次のテキストを見てみよう。

「製作された作品は製作という作業の形式を素描している。言い換えれば、製作者はその作品の中にまさに彼が投入したものだけを再発見する。例えば、一つの機械を作ろうとする時、製作者は機械の部品の一つ一つを切り出し *découper*、ついでそれを集めて組む。出来上がった機械には、諸部品とその集合が見出されるだろう。ここでは、結果の総体は作業の総体をあらわし、作業の各部分には結果の一部が対応するのである」（EC93-94）。

ここで述べられているのは、製作的知性が製作する典型的な道具としての機械が、物質をいくつかの部品へと切り出し、それを組み合わせて「一つの共通な作用」（*ibid.*）が得られるように作り上げたものだという特徴である。機械は、いくつかの部品という、明確に分割され固定された要素、つまり部品の組み合わせによって製作されるものであり、常に同じ仕方で運動するものである。機械こそが、知性のあり方を象徴する製作物であるのはこのためである。再生したい結果＝行動を、単純な要素＝部品の集合として作り上げることこそが道具の製作なので

ある。機械を製作することは、反復可能な部品の組み合わせによって、反復的に動作するメカニズムを作成するということである。こうした機械を製作する知性は、世界の中に反復する諸要素を見て取る知性であり、つまりは世界を機械として理解する知性である。

ところで、製作的知性が部品の集合として構築される機械を製作することについて、こうした知性の態度が、ベルクソンの実在理解の立場から言えば、実在を正確に捉えていないことになることに注意しなければならない。ベルクソンは最初の主著である『意識に直接与えられたものについての試論』から一貫して「持続」の哲学者であった。彼にとって実在とは、持続する意識がそうであるように、継起する諸状態が互いに相互浸透しあうような全体をなすもので、絶えず動的な運動であり、固定したり分割したり出来ないものである。こうした実在観に照らし合わせてもう一度製作的知性に立ち戻るならば、製作的知性は実在の真の姿を捉えるものではない。実在とは流動であり、世界は瞬間ごとに新奇なものとして立ち現れる。知性はそうした世界において、類似する要素、反復する要素を設定し、それらの組み合わせによって実在を理解する。機械という道具は、実在の動性を取り除き、等質化して捉え、明確な部品へと固定化し分割し再構成する道具である。機械とは、流動する実在的世界の中にあって、反復的に作動する対象として、あるいは少なくとも、反復的に作動することが確実だと見なされている対象として作り出される。もちろん、部品は、連続的に使用することで、徐々に磨耗するなどして変化していき、機械の動作の結果は一回一回微妙に異なる。また、再生産される一つ一つの部品も完全に同一ではなく、微妙な差異を持つであろう。そうしたわずかな変化や消耗、部品の個体差を製作的知性は「誤差」として無視する。私達の知性は、機械を製作するという在り方を通して、本来は瞬間ごとに新奇なものであるはずの実在を、反復する既知の要素の組み合わせとして理解するのである。また、機械というものは、反復的に運動する部品の集合として作られているからこそ、複数個の「同じ機械」を生産す

ることも比較的容易に実現出来るという利点を持つ。機械は反復的に動作するものとして、と同時に同じ機械を容易に生産出来るものとして作り上げられるのである。

そして、誤解してはならないが、実在をありのままの動的姿で捉えられないことそのこと自体は知性の仕事の価値を減じることはない。人間が生命として生存をかけて行動し生きのびていく時に、知性認識は必要であり、役に立つものである。製作的知性の限界は別の側面から論じられなくてはならない。この点については後節で述べることにして、ここでは知性が作り出す典型的な道具が機械であり、機械の特徴は、決まった部品の集合によって作られ、決まった結果を反復再生することにある点を確認しておこう。

ところで、ほぼ確実に反復再生する道具の中で、もっとも操作性が高く、多くの人にとって難なく用いることが出来る「道具」は言語である。やや先走って言えば、言語や記号などは、まさにこの固定化と反復的操作の最も優れた道具として、製作的思考の延長に製作の多様化の中で発達してくるものと位置づけられているのである。

機械とは何か（２）器官となって身体を拡張する道具としての機械

ここまで、機械の製作が私達にものごとを要素に分解し再構成することで全体を理解する態度を身につけさせることを論じてきた。製作的知性が機械を製作することに関連して、もう一つ重要な機械の特徴は、そうして作り上げた機械がまさに私の「器官」になるということだ。既に上述した通り、知性と双壁をなす本能の道具は有機的身体であり、身体の諸機能や諸器官であることを確認したが、知性が無機的物質を用いて作り上げた機械は、まさに私の「器官」として機能するべく作りだされ、私の身体を拡張する道具なのである。

「…私達の器官が自然に与えられた道具だとすれば、同様に、私達の道具は、人工的な器官な

のである。道具は職人の腕の続きである。人間の道具装置は人間の身体の延長なのである。自然は、本質的に製作的な知性を私達に与えることによって、私達にある種の拡張を用意してくれたのである」(DS330)。

道具を生み出すことは、私達にとって、新しい身体の獲得である。ベルクソンによると、私達の身体は本能的な行動のために「自然が与えた道具」なのであるが、私達自身が新たな道具を製作することは、知性の力で新たな行動のための新たな「器官」を獲得することである。たとえば私達が飛行機を製作しそれを操縦するとき、操縦の訓練を重ねる中で飛行機は私たちの意志に従って自在に飛行するようになり、私達は飛行機という機械をまるで自らの身体の一部であるかのように感じつつ、飛ぶという行動を行うようになる。こうした時、飛行機は、私達に飛ぶという行動を可能にしてくれる新たな器官である。このように、新たな道具を製作し、それを自在に扱うことが出来るようになることは、「私の身体」が新しく変化することである。新しい道具によって新たな行動が出来るようになることで、私達の世界への関わり方が変わり、そのことによって世界についての理解も変わって行くのである。それは、言ってみれば、生の新しい分節の仕方の獲得であり、新しい生のリズムの獲得である。

知性は、有機的体という道具では満足せずに、周りの物質や諸事物を利用して部品を作り、それを組み合わせて操作したり操縦したり出来るものへと、つまり自らの「器官」へと変換するはたらきなのである。そして、ベルクソン哲学において「労働・仕事」とは、生命の現れである知性が、等質的で惰性へと向かう物質という生命とは本性上異質な実在に立ち向かい、それをうまく使いこなせる形へ作り変えて行く「骨折り仕事」を第一義的に指すのである。道具の製作および機械の製作は、まさにそうした労働に他ならない。

ところで、自らの周りにある物質を新しい「器官」として利用可能なものに転じることは、単に器官のバリエーションが増え、行動可能性が増えるという

だけでなく、不在の対象を表象によって代替する思考にとっても決定的な前進になる。知性は、意識に現れた表象を操作することで、それが代理するところの不在の対象を操作したらどうなるかを予想し、行動の計画を立てるのであった。しかし、道具を製作し、それをあたかも自らの身体の一部であるかのように操作する知性は、単なる意識的表象ではない、道具という物質的な代理物を獲得したのである。ある物質的存在（この場合は道具）を、別な物質的存在（この場合は身体）の代理として製作し、操作するということは、意識内のイメージというところのないものを操作することに比べて明確であり、無意識化しにくいと言えるだろう。物質的存在を操作することは、単なる意識内の変容ではなく、実際に身体を使った行動だからである。先に、反復可能な固定化された要素の集合として機械という道具を作るという知性の特質からみれば、まさに言語という道具がうってつけの道具であることを述べた。ここまで述べてきた自らの身体を操作可能な物質的存在で代用することで拡張するという在り方についても、言語という道具がまさに操作の容易な物理的代替という点では究極的な到達点に見出される道具であることは明らかだろう。言語は、製作の材料となる物体を用いなくても、声という私達の身体を使って発生させられる音素を使って、様々な行動や結果を再生できる道具である。

従って、機械を作る製作的知性は、機械という物理的道具＝器官を増やしていく点でも、表象・言語という再現が容易で集団間の共有や伝達を飛躍的に進める道具＝器官を活用する点でも、私達の身体を拡張する知性なのである。

製作と労働：なぜ製作的知性は創造的ではないのか

これまで論じてきた製作的知性について、ベルクソンは様々な箇所では、私達の行動を適切に導き、生命体の生存を導くものとして、一旦は肯定的に論じる⁷。機械製作の場面で人間の発明的精神が発揮されることにもたびたび言及する⁸。にもかかわらず、製作的知性の機械製作は決して創造的なものとは見

なされない。製作的知性の議論では、常にその限界が示唆され、否定的なトーンがつきまとう。知性が創造的生命の一翼を担うのであるならば、なぜ製作的知性は端的に創造的なものではありえないのか。製作的知性の限界は、実のところ、どの点にあるのだろうか。

この点について、技術論の分野で優れた業績を残しているセリス (Jean-Pierre S  ris) は、次のような大変興味深い指摘をする⁹。セリスは、ベルクソンがメヌ・ド・ピランやラヴェッソンから続く「努力の哲学」の系譜の継承者であることを強調し、ベルクソンにおける「労働」を理解する際に、「努力」が一つの鍵となると指摘する。

ここでピランの「努力の哲学」について簡単に見直しておこう。ピランは、「私」というものは「私ならざるもの」を克服しようとする努力の意識に他ならないと考える。努力しないとき、私と私を取り巻く世界とは一体のものとして明確な境界はない。しかし、私が動こうとするや否や、私の身体、例えば腕は、その重さやぎこちなさによって、動こうとする「私」の意志に抵抗してくる。その時初めて、「私」は、「私でないもの」と区別され意識される。ピランにとって私とは、「抵抗に対する努力の意識」なのである。ところが、私が運動に習熟するにつれ、腕は自在に動くようになり、もはや私に抵抗してこない。私と腕の間の境界は薄れ、私は習慣化した運動を機械的に繰り返すだけで、再び世界と一体のまどろみに沈むことになる¹⁰。

セリスは、ベルクソン哲学が、こうした構図を継承しながら、それ以前の哲学者とは異なる仕方、努力の感情のうちにある積極的な力の兆候を見出す哲学だと位置づける。だからこそベルクソン哲学において、生命の運動、生命の創造性はその展開のために物質を必要とするし、物質は私達に「強度」を要求する役割を果たすのである。

しかし、物質に立ち向かい、物質を手なずける方法の一つである知性の労働は、「弱体化された労働 *travail appauvri*」だとセリスは指摘する。ベルクソンが知性の「労働」について批判するのは、それが操作的で実在を捉えそこなうからではなく、ベルク

ソンの意味において「十分に働いていない *ne travaille pas assez*」だからだとセリスは言う。どういふことかと言うと、知性の製作を支えているのは、努力を節減しよう、疲労を節減しようという怠惰と節約の発想である。全ての労働は疲労を生み出すものであり、労働することはその疲労を絶え間なく乗り越えることに他ならない。知性はそうした絶え間ない乗り越えを怠り、ひとたび機械を製作すると、それ以上の改良を怠り、手慣れた同じ機械を製作することで満足する。セリスはこうした知性の在り方を「努力 *effort*」の知性ではなく、「疲労 *fatigue*」と「怠慢 *paresse*」の知性だと評した。

セリスは、製作的知性にまつわるベルクソンのテキストの中に「分割する」「測定する」「生地」「再現する」などのタームが頻出することに注目し、ベルクソンの製作的知性は「仕立屋」の知性だと分析する。すなわち、既成服を決まったパターンで作り、生命や身体固有性には配慮しない仕立屋が知性の姿である。ベルクソンの知性の製作は、出来あいの「キット」の製作であり、「ドゥ・イット・ユアセルフ」の製作であり、未来の結果を限定し保存しようとする「より働かないための策略」だとセリスは言う¹¹。

知性が生命の創造性を発揮し、その生命の推進力に導かれて、より以上のものへより高みへと努力し続けるのであれば問題はない。しかし、物質と拮抗し生存を確保しようとする知性は、生命エネルギー本来の不屈不休なダイナミズムを失い、まさに安定した生存を求めるがゆえに疲労を避けエネルギー消費を節約しようとする点で、ベルクソンの生命哲学の本流から外れてしまうのである¹²。製作が批判されるのは、それがまさに安定した生存を確保しようとするがゆえに、生命的な動性とは離れて反復再生の中に安住してしまうからだ。ベルクソンにとって、生命の動的創造性は、物質の等質性の中に安住してしまうことはもちろん、純粹持続の創造の高みに留まったままであることも、原理的に許さない。生命は、常に物質を通して具現化することを目指しながら、と同時に常に持続の深みに立ち戻り、自身を豊かにし続ける絶え間ない運動なのである¹³。

要するにセリスは、ベルクソンの生命哲学の中での知性の在り方のうちに、ピランの努力の哲学と同型的なものを見出して解釈する。ピランにおいて、私が私という意識的存在であり続けるためには、新たな行動への不断の努力が必要である。一方ベルクソンにおける「知性」も、同様の構造の中にある。知性は機械を製作することで、生命固有の創造性の一端を示す。しかし機械とはまさしく、いつも同じ運動を繰り返すものである。いつも同じ機械を製作する知性は、反復運動に終始する中で、一端は発露した創造性を再び失ってしまう。知性は、本来は無限の躍動であり、不休不屈であるはずの生命のエネルギーを十全に実現するものではないのである。

ピランの原初的経験においては、私の身体が私にとって抵抗として立ち現れる。これに対してベルクソンの製作的知性は、身体ではなく無機的な物質を加工する点で本能との違いが際立つ。またベルクソンの製作的知性に関する記述の中では、一見すると「努力」「抵抗」は必ずしもキータームとは言えない。こうした表面的な差異を超えて、ベルクソンの知性の構造をピラン的な意識の哲学と同型とみなして考察する点に、セリスの解釈の独創がある。

ここまで、ベルクソンの「労働」について以下の点を確認してきた。ベルクソンの生命論の中で、「労働」の問題は、まず知性の製作労働の問題としてクローズアップされる。彼は、知性が物質を道具へと作り上げるはたらきであることを指摘し、人間はこの労働を通して反復可能な要素の操作という態度を身に付け、直接的な行動を離れて表象による思考をする態度を学ぶのだと考える。第二に、知性の労働は、純粋に生命の創造的な営みを反映するわけではなく、楽をし、自動化すなわち脱精神化・脱意識化することを目指す傾向を持っており、その意味で怠慢と節約に根ざしていることを特徴とする。

以上の節では、ベルクソンの知性について取り上げながら、製作的知性が物質を加工し機械を作るという場面を見て来た。こうした製作に取り組む製作者は、一人で物質を相手に奮闘する人間であった。より正確に言いなおせば、『創造的進化』の製作者は、一人の個人だともみなせるが、むしろ種として

の人間一般を代表する存在だとみなすのがより適切かもしれない。いずれにせよ、ここまで問題にされてきたのは、複数の人間が集団を作って組織を形成し、その組織や社会の中で人間が働くという場面では必ずしもなかった¹⁴。そこで今度は組織の中で働く人間、他の人間と共に働く人間について考えるために、『道徳と宗教の二源泉』にテキストを移して、ベルクソンの社会論を見て行くことにしよう。

ベルクソン哲学における労働（2）社会の中で働くということ

第四主著である『道徳と宗教の二源泉』に至って、ベルクソンの考察は人間が社会に生きるという場面に主軸を置いたものとなる。人間がどのように社会生活をいとなみ、どのように社会の維持をはかっていくのか。持続する意識の創造性、絶え間なく噴出する生命の創造性を、人間という種は実際にどのような仕方で開催しているのだろうか。これまで述べてきたことから明らかなように、ベルクソンは人間の社会生活を論じるに当たっても、蟻やミツバチが緊密な社会を形成するのと同様、本能的な傾向に根付いているものだと考える。自然の本性は私達が社会的生をいとなむよう宿命づけている。これは何も、人間が知識を蓄積したり意識的に協力関係を築くことの出来る高度な知的存在だからではない。蟻やミツバチは知性的認識や意識的判断をしなくても整然とした社会を営んでいる。むしろ、私達人間の社会が、蟻やミツバチの社会と同じ自然本性に導かれ同じように本能に決定づけられたものであることを見落としてはならない。ただし、人間の社会が昆虫の社会と異なるのは、昆虫の社会が完全に盲目的に本能に統制されているのに対して、人間の社会においては社会的生を送るという傾向は本能的に決定づけられているが、どのような社会をどのような規範や制度に従って営むのか、そうした具体的内容は多様でありえるし、時代や場所によって変化する。前節まで論じてきた知性の特徴に関連づけて言えば、人間の製作的知性がどのような道具を獲得しているかによって、社会の分業の仕方は変化するし、

社会秩序も変化する。知性は、人間の社会がどのような社会を作るかという点に関して選択肢を増やし自由度を高めてくれるのである。

ところで、人間が知的思考を展開することは、道具の製作によって労働を軽減したり選択肢を増やしたりするばかりでなく、人間社会の成員のうちにエゴイズムを生み出したり死の不安や無力感にさいなまれたりするという形で、社会の結束力をおびやかす破壊力も発揮する。そこで、人間の社会が、成員の逸脱を防いで結束力を高め、安定した存続をはかるために必要となるのが、「道徳」や「宗教」なのだとベルクソンは考える。私達は知性を駆使し様々な選択を実現できるからこそ、様々な紐帯によって社会へと緊密に結びつけられる必要ももつ。ベルクソンは、人間が規範を守り道徳的行為をなすという事態についても、生命活動の一端として捉えて考察するのである。

従って、ベルクソン哲学において道徳的義務の問題は、例えば、「嘘をつかない」というルールをいかに欲望の誘惑や特殊な事情などの状況性に流されることなく守るべきなのかというような、規範倫理学的なアプローチによって深められることはない。私達がよい行為へ、道徳的行為へと導かれるのは、知的な選択によってではない。ベルクソンが道徳と宗教を考察するのは、道徳や宗教が、生命種としての人間社会を維持し、人間たちを結びつけ社会を緊密化する「生」の努力のあらわれだからである。以下では、この点をふまえた上で、ベルクソンの社会論の中で人間の労働がどのように位置づけられているか確認して行こう。

「閉じた社会」の「閉じた道徳」

ベルクソンにとって、社会の中の労働は、まず社会の中の義務として語り出される。『道徳と宗教の二源泉』の最初の数ページから、人間が社会の中でなす労働が社会的な「義務」として取り上げられる。いわゆる「閉じた社会」の「閉じた道徳」である。

ベルクソンによれば、私たちが、社会のきまりを守り、道徳を守ろうとする仕方には、本性上異なる

二つの仕方がある。つまり、人間社会の中で成員を規律づけ結束させる「道徳」あるいは「宗教」には二つの本性的に異なるものが見出される。私達が具体的にその中で生きているあれこれの社会は、二つの要素の混合体であるあれこれの「道徳」や「宗教」によって支えられているのである。

一つ目は、「閉じた社会」を形成する「閉じた道徳」「閉じた宗教」と呼ばれるものである。私達は社会の中で様々な役割を果たし、そうした社会的役割を果たすことで互いに拘束しあい従属しあって一つの連帯を作り上げる。例えば「よき夫」「よき市民」「よい労働者」(DS13)といった具合である。家族という小さな社会集団の中で「よき夫」として振る舞うことが、職場や地域社会などより大きな集団の成員として適切な振る舞いを支える構造になっている。私達は通常こうした役割を意識せずに自動的に果たしているので「社会的習慣」(DS2ほか)とも呼ばれている。こうした社会的習慣の総体が道徳として、私達を社会にしっかりとつなぎとめるはたらきをする。この道徳は、社会の連帯を緊密にするのに、既成の限定された集団の安定的維持という仕方ではたらくので、その集団の外部を警戒し外部に対して排他的にふるまう「閉じた道徳」である。

同様に、こうした社会の緊密化を知性的な表象によってはかるのが「閉じた宗教」あるいは「静的宗教」である。閉じた宗教は仮構の観念に支えられている。宗教を生み出す仮構の物語は、「知性的」な事態として、盲目的な本能とも、創造的な情動とも異なる仕方では私達を結集する力を発揮する。仮構が生み出す神話や物語は、知性的人間が抱きうる不安や個人的な欲望の暴走に対抗して、社会的協力関係へと立ち戻らせ、特定の儀礼や教義を反復することで共同体の結びつきを緊密にする仕方ではたらく。儀礼や祭礼のやり方や祈りの表現は形式化され、反復する。閉じた宗教は、社会の結束を観念・言語・習慣などの形式を通して具体化し、安定した状態を恒常化し自動化するために制度として固定化される。ベルクソンにおいては、道徳や宗教も、「生物学的な本質を持つ」ものなのである(DS103)。

ところで、こうした「閉じた社会」がいびつな仕

方で極端に発達してしまった状態の一つとして、『道徳と宗教の二源泉』第四章は、機械技術 *machinisme* の発展と「閉じた社会」間の戦争状態について取り上げている。

「自然は人間に製作的知性を与えた。自然は、他の多くの動物に対してしたのと同じように道具を（身体に）具えつけるのではなく、道具を人間が自分自身で作り出すことを望んだ。さて、人間は自分の道具に対して所有権を持つ一少なくともそれを使っている間はそうである。しかし、道具が身体から切り離されたものなので、誰かに奪われることが起こりうる。出来あがったものを奪う方が、製作するよりも簡単である…そうなれば戦わなくてはならない…戦争は自然なものである」(DS302-303)。

閉じた社会に見られる自己本位な姿勢、強固な団結、外敵に対する敵対心が強化されればされるほど、戦争は避けがたいものとなる。おまけに、現代において私たちが手にしている道具は考えられないほどの殺傷力を持つ。

人間を戦争へと駆り立てるこうした傾向は、私達の文明の産業主義によって加速・強化される。人口の過剰、産業の不均衡の是正、燃料や原料の不足などがこのまま進むのであれば「戦争は避けられない」(DS309)とベルクソンは警告する。機械そのものは、「つらい労働をする人間を助ける」(DS326)、「労働者により多くの休息時間を得させる」(DS327)ことが出来るはずのものである。しかし、ベルクソンによれば、機械技術は、商業主義と利益拡大への欲望に囚われることによって、暴走し肥大化してしまった。

「…何万年もの間蓄積された潜在的エネルギーを運動に変える機械は、確かに私たち人類の構造計画のうちでは全く予想もつかなかったほどに、私たちの器官を拡大し、この器官の寸法と力には不釣り合いな恐るべき力を与えるに至った。つまりこれはかえがたい幸運であり、地球

上の人間の最大の物質的成功であった…さて、この不釣り合いに肥大化した身体の中で、魂は以前と同じままであり、身体を埋めるには小さすぎるし、身体を統制するには弱すぎる」(DS330)。

生命としての人間を助けるためのはずの機械製作は、人類の生活を等しく改善し飢餓や食糧不足を解消するのではなく、結果として一部の人間が過剰に贅沢と快楽と富を得るような形で発展してしまった。この巨大化した身体・肥大化した器官＝機械を統御するためには、私達の魂は小さすぎて弱すぎる。だから今度は「精神的な潜在的エネルギーを新たに貯蔵すること」(ibid.)が必要となる。だから、「機械論は神秘主義を要請する」(ibid.)のだとベルクソンは言う。機械産業の究極の発展は、「開かれた社会」へと人類を導く英雄・神秘家の呼びかけの日を到来させるのである。

人間の労働は、閉じた社会の中で、義務として私達に強制され、私達を共同体のための役割へと閉じ込める仕事という様相を呈する。機械文明や科学技術が発達した私達の文明社会においては、他者の道具を奪い奪われ、不可避的に闘争を繰り返す戦争状態へと私達の労働は行き着くしかないのだろうか。ベルクソンの提案する解決を求めて、次節では「開かれた社会」「開かれた道徳」について見て行こう。

「開かれた社会」の「開かれた道徳」

ベルクソンの「労働」概念の辿ってきた道を、製作的知性に着目して追ってきた私達は、貧富の格差と戦争という悲観的にならざるをえないような社会へと辿りついてしまった。私達をよりよい生の在り方へと向かうよう導く生命の力が目指す創造的な社会・創造的な宗教はどこへ行ってしまったのか。

ベルクソンは、私達を道具の暴走的発達や外敵との闘争へと導く「閉じた社会」「閉じた道徳」とは全く異なる道徳・宗教として、「開かれた道徳」「開かれた宗教」について論じる。これは、ある特定の個人の存在や行動によって体现されるもので、こう

した「英雄」「聖人」はその存在自体が呼びかけとなる。こうした道徳は特定の集団内だけにはたつきかけるものではなく、原理的に人類愛と同じ広がりを持つ。「開かれた社会」は、固定的な義務や強制された規律とは無縁で、創造的情緒である愛にもとづき、聖人という天才の呼びかけに人々が呼応することで結びつき合い、生命のエランを社会において実現するような社会である。

前節で取り上げた「閉じた道徳」「閉じた宗教」においては、さまざまな宗教的表象や道徳的表象が私達の反社会的行動を規正するのは、それらに違反したら罰が当たるなど、私達の不安や恐怖心に働きかける形によってであった。また、静的宗教は、儀礼や祭礼、祈りの形式などを固定化し反復することで社会の結束力を強化する。閉じた道徳や静的宗教は、私達に何らかの強制力を行使することで私達の行動を規正するのである。

これに対して動的な宗教においては、人々は強制されたり操作されたりするのではなく、自らの内的な情動のみにもとづいて行動し、社会的な結びつきを形成する。成員を結びつけるのは、義務や規律といった観念や形式を越えた先にある「知性以上のもの」であって、「情念 *passion*」であり「愛 *amour*」であり「慈愛 *charité*」といった情動や感情の力だとベルクソンは言う。動的な宗教においては聖人や英雄というすぐれた天才の努力と創造的な情動である愛にもとづいて人々が内的に結びつき合うのである。

注意しなくてはならないが、ベルクソンが述べる英雄や聖人は声高に自らの正しさを教えを主張したりはしない。「彼ら（聖人）は何も要求しないが、確かに獲得する。彼らは説き勧める必要がない。彼らはただ存在する *exister* だけなのである。彼らの存在が呼びかけなのだ」（DS30）。「開かれた社会」においては、聖人を中心として、彼の呼びかけに応えることで人々が集まるが、彼らは聖人を崇拜するわけでも、彼を支配者に仕立てるわけでもない。聖人の呼びかけに、一人一人の成員が唯一無二の個体として自発的に結びつくのである。

こうした結びつきは、強制や義務感とは全く異質である。英雄や聖人に対する私達の関係を、ベルク

ソンは音楽の情動や芸術家への熱狂になぞらえて次のように説明する。

「音楽が喜び悲しみ哀れみ同情のいずれを表現しているにせよ、どの瞬間にも、私達はその音楽が表現するものになっている。単に私達だけでなくさらに多くの人も、すべての人も同じである。音楽が泣けば、まさに人類と、自然全体がともに泣く。実を言えば、音楽がこうした感情を私達のうちに導き入れるのではない。むしろ、あたかも通行人をダンスのうちに押し込むように、私達の方をそうした感情のうちに導き入れるのである。道徳における先導者たちが行うのはこのようなことで、彼らにとって生命は新しい交響曲が与えうような思いがけない感情の反響を持つのである」（DS36）。

このような、人々を結びつけあう愛の力、共感の力を十全に體現した者こそが、「聖人」である。彼らは、知性や仮構の媒介なしに、単に存在するだけで人々に呼びかけ、人々を感化し、結び付けあうのである。

また先の節で少し指摘したが、こうした英雄や聖人は、休むことをしらず不屈不休で働き続ける。ベルクソンにとって、聖人が聖人たりえるのは、彼らが瞑想や観照に満足するのではなく、行動するのである。彼らの生命エネルギーは、けた違いの行動力・実現力を発揮して、涸れることがない。「聖パウロ、聖テレサ、シエナの聖カテリナ、聖フランシスコ、ジャンヌ・ダルク、他にも多くの神秘家が行動 *action* の領域でどれほど多くのことを成し遂げているかを考えてみればよい」（DS241）とベルクソンは言う¹⁵。英雄や聖人は、生命のエランを地上での行動へと具現する人々であり、その実現を休むことなく、あきらめることなく続ける天才である。

ところで、製作的知性と道具としての機械を考察してきた私達にとって、次のテキストはきわめて注目にする。

「今、おそろしく強靱な鋼を素材として、途方もない努力をさせる目的で造られた機械があったとしたら、仮にその機械が完成の瞬間に自己意識を持ったら、間違いなく神秘家と似たような状態に置かれることだろう。機械の部品は一つ一つ最も厳格なテストにかけられ、いくつかの部品は取り除かれ交換され、あちこちに不全感を感じたり、いたるところで苦痛を感じるだろう。しかしその苦痛は表層的なものであり、深層ではよりよい器 instrument になる期待と希望のうちに消されてしまうだろう。神秘家の魂はまさにこのような器になりたいのである」(DS245)。

バルクソンは、神秘家や聖人といった特権的人格を、機械に譬え、「器」だと表現する。彼らは、自分の素晴らしさを強調することではなく、むしろ「器・道具」に徹することで、生命のエネルギーを伝搬者となるのである¹⁶。

生命がその創造性を十全に発揮する「開かれた社会」としてバルクソンが考えたのは、知性的な義務遂行や賞罰などによって動く社会ではなく、私達の生命が私達に訴えかける情動に従い、その情動が十全に発露することによってのみ、実現される社会なのである。そうした社会においては、ある目的のもとに功利的に構築された義務の体系はもはや意味を持たず、労働は苦しいものでもつらいものでもない。各人は、聖人の呼びかけに答えて、自分のためでも義務のためでもなく自発的に働き、その働きはまた、我知らずのうちに他の人への呼びかけとなって広がっていくのである。

おわりに

これまでの考察を整理しておこう。

私達は始めにバルクソンにおいて「労働」の問題は、製作的知性がなす労働を通して考察されることを確認した。バルクソンによれば、生命としての人間にとって労働とは、まず何よりも製作的知性の道具作り、すなわち機械製作であると考えられる。機

械を作る知性は人間の生存を確かなものにしてくれる。にもかかわらず知性の仕事はあまり評価されない。なぜなのか。セリスの考察を参照しつつ明らかにされたのは、知性が創造的努力をすぐやめてしまうということであった。知性は、機械製作を通して発明精神を発揮し、新しい身体と新しい秩序を作り出すが、すぐに反復的再生のうちに安住してしまう。

しかし、知性が本当に怠慢なのか、そしていかなる意味で怠慢なのかという課題については、今後さらに詳細な検討が必要だろう。実際に知性が機械製作に励むことでもたらされるのは、文字通りの怠惰な休養ではない。機械は同じ物を作るための労働時間や労力を軽減するが、そうして削減された時間や労力が休息や怠慢のために浪費されることは通常はない。少なくともこれまでの人間の歴史では、機械がもたらしたのは長い休息時間ではなく、生産量の増大であった。人は、手作業の時と同じ量のものを機械でさっさと作ってあとは休息するのではなく、これまでと同じ（あるいは従来以上の）労働時間を働いてきたのである。しかも人間は、常に機械を改良し続けてきた。製作的知性との対比された生命のエランの特徴はその不屈不休さにあった。不屈不休に機械を改良しつづける知性であれば、創造的な労働を実現できるということになるのではないのか。もしそうでないとすれば、知性には何が欠けているのか。

これは別の言い方をすれば、生命の「不屈不休さ」とはどういうことかという問いでもある。知性が不屈不休に機械を改良したとして得られるのは、商品の生産量の増大と金銭的利益の拡大だけである。創造的生命のあくなき躍動と噴出は、単なる産業活動の枠そのものを超え出していくような力を持っているはずだ。機械文明の拡大は、産業活動を超え出るか。例えば、機械が機械を生み(つまり機械が生殖し)、自律的に生産活動に従事してくれることで、人間をもはや労働から解放してくれるかもしれない。しかし、そこに至れば、知性は永遠の怠惰をむさぼることができてしまう。物質を手なずけることに必死な知性はいつもそうした理想の終極を夢見る。その夢は怠惰の夢であり、それゆえにこそ知性は怠惰であ

り、生命の不屈不休と一致なくなってしまうのだろうか。こうした点で考察を進めていくことは、従来のベルクソン解釈にはない、新たなベルクソン像を見せてくれることになるかもしれない。

話を労働の考察に戻そう。ベルクソンは、各人が聖人の呼びかけに答えて、自分のためでも義務のためでもなく自発的に働き、その働きが我知らずのうちに他の人への呼びかけとなって広がっていくような「開かれた社会」を描こうとした。しかし、そうした「開かれた労働」は、部分的にであれ、どのようにして実現されるのだろうか。いやむしろ、こうした社会や労働の危険性をこそ、指摘するべきではないのか。というのも開かれた社会をめぐる言説は生命本来の創造性を抹殺するような危険な解釈を呼び寄せてしまいうるからである。優れた聖人への熱狂、その聖人に導かれて創造的情動に一致する…。こうしたレトリックはあまりにも容易に全体主義的な暴力的組織に悪用されうるだろう。例えば、いわゆるブラック企業や新興宗教などの言説と似通っているという誹りを受けえる側面を持っていることは否めない。

けれども、そうした彼の社会論を危険なつまらないものとして片づけてしまうのは、ベルクソン読解として非常に浅薄で魅力のない読解に他ならない。

「開かれた」労働を特徴づけるのは、不屈不屈の生命の躍動性であった。確かに、ベルクソンの生命哲学において、創造的な聖人も、反復再生を続ける機械も、どちらの極においても、人間はとにかくひたすら働き続ける。盲目的と言ってもよい。本論文の冒頭で、私達は「自分のために働くのか」という問いを投げかけた。聖人は、生命の創造性の「道具・器」である。だから、この不屈不休の労働は、「自分のため」の労働ではありえない。むしろ態度としては「無私」に近いと言えよう。だからといって反対に、特定の「組織のため」「リーダーのため」といった間違った形で、閉じた組織や特定の個人のために働くことだと解釈できるかと言えば、それもありえない。ベルクソンにとって開かれた労働は特定の組織の利益や生産性に執着しない。開かれた道徳は、異質な他者と闘争したり排除したり決してせ

ず、つまり人類愛と同じ広がりをも有し、かつ同時に、一人の人格のうちに実現するはずである。こうした労働は、現代の資本主義社会の中で利益拡大主義や効率至上主義などにどっぷり浸かった私達にとっては、非現実的なものに見えるかもしれない。しかし、今一度考えてみてもよい「労働」の姿がそこに見え隠れしているのではないだろうか。

引用、ベルクソンのテキストからの表現は、() の中に PUF Quadrigue 版の頁を示した。引用文中の下線は原文イタリック箇所を示している。引用に際して、以下の略号を用いた。:

DS: *Les Deux Sources de la Morale et de la Religion*, PUF Quadrigue

EC: *Evolution Créatrice*, PUF Quadrigue

ES: *L'Energie Spirituelle*, PUF Quadrigue

MM: *Matière et Memoire*, PUF Quadrigue

- 1 「キャリア教育」とは、1999年の中央教育審議会答申では「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」だと述べられている。いわゆる「フリーター」「ニート」問題などと呼ばれる若年層に増加する雇用問題の改善に向けて、政府による対策として、従来から行われてきた就職支援に加えて、正規的教育課程の中でこうした教育に積極的に取り組むことが推進され、2011年からは大学でのキャリア教育が義務化されている。
- 2 例えば、このような違和感について、より先鋭的な仕方で開催した議論が、中島義道の『私の嫌いな10の言葉』新潮社(2000年)の中に見られる。中島は「自分の好きなことがかならず何かあるはずだ」という言葉を嫌いな言葉として取り上げ、これは「欺瞞」だと看破する。「好きなこと」は、「売春」や「万引き」であってはいけないし、「(世界的なプロリーグの)サッカー選手」「ファッションモデル」といった手の届かない大それた夢であってもならない。その学生が実現出来そうな狭い範囲の中で具体的な妥協案を「好きなこと」という名目で探させる欺瞞を中島は批判する。
- 3 「仕事に生きがい」という労働倫理は高度成長期に形成された比較的新しいものであり、余暇や遊びと対極にあるものとしての仕事という構図ではもはやうまく労働を捉えられないと鷺田清一は指摘している。鷺田清一『だれのための仕事』岩波書店(2006年)を参照のこと。

- 4 「自分の内面には自分らしさなるものが実在している」という発想が最近の若者に蔓延していることの問題については土井隆義『「個性」を煽られる子どもたち：親密圏の変容を考える』岩波書店（2004年）を参照。
- 5 こうした労働観を巧みに利用することで低賃金労働に「生きがい」を感じさせるような企業もある。福島文二郎『9割がバイトでも最高のスタッフに育つディズニーの教え方』中経出版（2010年）はそうした観点から解釈されるべきであろう。
- 6 正確に言えば、『試論』『物質と記憶』の中でも、「仕事・労働 travail」というタームは、例えば、持続の深層の動的実在を言語や身体などを通して物理的な行動へと具体化する「(骨折) 仕事」について述べるという形で登場している。しかし、本論文では、社会の中で働く人間の労働にまずは焦点を当てるため、この点については詳述しないことにする。
- 7 例えば、「知性の要素をなす全ての力は物質を行動の道具に、すなわち語源的な意味で器官に変えようとする。…知性は、無機的自然のやり方を原理的には採用し、実際には操縦する diriger ことによって、外を見つめ、自己自身に対して自己を外的ならしめる生命である」(EC162) など。
- 8 例えば、製作的知性による発明が物質に対する「自在感」「新しい感情」(ともに EC184) をもたらすとして評価しているテキストなど。
- 9 «Bergson et la technique» in *Bergson : Naissance d'une philosophie*, PUF, p. 132
- 10 詳しくは『習慣論』など。なお、ピランについて、日本語で手軽に概観できる文献としては、北明子『メーヌ・ド・ピランの世界』勁草書房（1997年）なども参照のこと。
- 11 前掲論文、p. 135
- 12 セリスは加えて、怠惰な知性とは対照的に、『二源泉』の聖人や英雄たちが、常に行動の場面に立ち帰る、つまり常に物理的に展開するという「仕事」をしながらも、決して枯れることなく不屈不休に生命エネルギーを体現し続けることも指摘する。ここに、自動的な反復再生に安住しようとする知性のエネルギーと、困難な「仕事」においても不屈な聖人の創造的エネルギーとが鮮やかに対比される。
- 13 創造的生を常に努力し続けるものとして描く議論は他のテキストでもたくさん見られる。一例をあげると、『物質と記憶』の知覚イメージが記憶を参照しながら豊かに膨らみ続ける図 (MM115) や、『精神のエネルギー』の「知的努力」の中で描かれる観念を実際の運動へと結びつける作業 (ES176など) などをも思

い浮かべればよいだろう。後節で取り上げるが、聖人の存在も、休むことなく働き続けるからこそ愛の躍動を体現するのである。

- 14 ただし、『創造的進化』の製作についても、人間が共同作業をすることが既に含意されている記述はちらほら見られる (EC158など)。そもそも、前節で述べたように、ベルクソンは部品からなる機械を諸器官からなる有機的身体との類比が述べられている度に、機械の一部である部品と同じように、社会という全体の中で一部として働く人間が示唆されているとも言える。その意味で、製作的知性を作る機械の話は個人の製作者の話で完結するものではない。注16も参照のこと。
- 15 他にも、哲学的英雄ソクラテスは「自分の知恵のうちに閉じこもる」ではなく「行動する」(DS215) のだという言述や、天才ベートーベンが創造的なエネルギーを交響曲という物理的な音素の集合へと具現する仕事をなしとげたのだ (DS61) と述べているテキストなどが思い出されよう。
- 16 機械と創造的生命の関係については、ベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』の最後の一文で、宇宙全体を「神々を生みだす機械」(DS338) と述べているテキストとの関連性も掘り下げる必要がある。紙幅の都合上、今回の課題とする。

参考文献

- Arnaud Francois, 2008, *Bergson*, Ellipses
Henri Gouhier, 1961 (1987), *Bergson et le Christ des Evangiles*, Fayard (1961) ; Vrin (1987)
Vladimir Jankelevitch, 1959, *Henri Bergson*, PUF ; 『アンリ・ベルクソン』新評論
Jean-Pierre Sérís, 1990, «Bergson et la technique» in *Bergson : Naissance d'une philosophie*, PUF : 121-138
Frédéric Worms, 2000, *Le vocabulaire de Bergson*, Ellipses,
石井敏夫, 2007, 『ベルクソン化の極北』理想社
永野拓也, 1999, 「ベルクソンにおける労働とその価値」, 日本哲学会編『哲学』第50号 : 234-243
北明子, 1997, 『メーヌ・ド・ピランの世界』勁草書房
土井隆義, 2004, 『「個性」を煽られる子どもたち：親密圏の変容を考える』岩波書店
中島義道, 2000, 『私の嫌いな10の言葉』新潮社
福島文二郎, 2010, 『9割がバイトでも最高のスタッフに育つディズニーの教え方』中経出版
鷲田清一, 2006, 『だれのための仕事』岩波書店

抄 録

本論文では、「労働」とは何か、「働く」とはどういうことかについて、ベルクソン哲学を手がかりに考察していく。

ベルクソンによると、他の動物と対比して人間の特徴は知性を持つことである。そして、この知性の典型的な働きは、機械を作ることにある。それゆえ、人間は「ホモ・サピエンス」である以前に「ホモ・ファベル」なのだ。機械とは、要素的な部品の組み合わせによって作られた、反復的な動作をする道具である。こうした機械の特徴は、知性の在り方を象徴するものでもある。また、機械は、人間の身体を拡張し、新しい「器官」となる点でも重要な意味をもつ。

ところで、セリスの解釈によると、ベルクソンの知性は、生存のために労力を節約することを一つの目標とする点において、「怠慢な知性」である。例えば、機械の製作は、生産の労力の削減のためになされるのだ。知性は怠慢であるがゆえに、生命の持つ無限のダイナミズムを実現しきれない。

ベルクソンが生命のダイナミズムの開花を見るのは、「開かれた社会」における「聖人」の働きにおいてである。聖人は、自分のためでも義務のためでもなく自発的に働き、その働きが知らず知らずに他の人への呼びかけとなる。呼びかけに答える人々の働きが、開かれた社会を作る。こうした労働の在り方は、「自己実現」を仕事の目標とするような昨今の労働観に対する一つのアンチテーゼとなりうるだろう。

キーワード：ベルクソン、労働、製作、知性